

仕合わせ

の和

第204号
H. 31. 3. 1
(毎月1日発行)

お彼岸を迎えて

住職 谷川寛俊

今年も一週間のお彼岸を迎えます。苦しみ多い迷いの世界を「此岸(しがん)」というのに対し、安らかな平和な世界を「彼岸(ひがん)」と申します。

つまり悟りの境地に至ることが、仏教の究極の目標であります。また彼岸の行事はご存知の通り、日本にしかない行事でもあります。

先月、日蓮聖人がお亡くなりになった東京・大本山池上本門寺のすぐ横に、宗務院(しゅうむいん)日蓮宗の事務局本部)があります。ある講習会に出席してきました。

お昼の休み時間を利用して、久しぶりに、本門寺さんのお堂へ参拝に行ってみました。

ご参詣なさった方はご存知のように、本門寺山門正面の石の階段は「此経難持坂(しきょうなんじさか)」と呼ばれています。この此経難持坂は、加藤清正公が寄進されたもので、弘長元年(1261年)に日蓮聖人が伊

豆の伊東へ流罪される際、共に流罪に処するよう懇願した弟子の日朗上人(にちろう)しようにん)六大弟子の一人)は、腕を船の櫂(かい)で打ち折られてしまいます。この時、由比ヶ浜(ゆいがはま)から船が出て行くのを見送る弟子や檀信徒達に向かつてお読みになったのが、この此経難持(法華經宝塔偈の一節)であり、波に揺られながら唱えられたことにより、現在のような独特の節回(ふしまわ)しで唱えられるようになったと伝えられています。

《此経難持・若暫持者・我即歡喜(略)一切天人・皆応供養》

「しきょうなんじしやくかんぎし(略)しやくがそくかんぎし(略)いっさいてんにんかくいおくくようし」とお唱えします。このお経を現代語訳すると次のようになります。

【現代語訳(方塔偈)】

この法華経を信じ行(おこな)うことは大変難しい。もし少しの間でもこの法華経を信じ行うものがいたならば、

真成寺ホームページ

<https://bit.ly/2Gz55Mz>

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でも
お寺につながります。

ご承知のように、法華経はお釈迦様が数多くの経典をお説きになられた中で、最も最高の経典であり、結論でもありました。どうか、お彼岸の一週間、心穏やかに題目、法華経を唱え、ご先祖様をお慰み下さい。どんなにかご安心なされる事と思います。

